

舞台の力

—道徳教育のできる教室のための基礎理論—

野崎真奈美^{*}，紅林 伸幸

The Force of the Stage: Basic theory for the moral discussion

Manami NOZAKI, Nobuyuki KUREBAYASHI

2015 年 11 月 19 日受理

抄 録

道徳の「特別の教科」化が決定し、道徳の授業のいっそうの充実が求められている。特に、《討論》（討論、対話、議論）を積極的に用いた道徳の授業が求められ、《討論》を通じての道徳の学習、道徳性の発達がねらいとされている。しかし、討論型の道徳の授業の提唱者である L・コールバーグは、現在の学校において道徳の《討論》が困難であることを指摘し、効果的な道徳の教授法は学校改革を伴わなければならないことを明らかにしている。けれども、日本では、学校構造の改革を伴う道徳の授業を実践することが不可能である以上、討論を可能とする条件を別のところに求めなければならない。そこで、演劇に魅了された 11 人の若き演劇者へのインタビューにより、演劇の舞台の力にそのヒントを見いだす。舞台は、受容、発散、浄化の場として、人々を魅了し、参加を促している。教室にもそれらが必要である。

キーワード：道徳の授業，モラル・ディスカッション，舞台の力，演劇，討論

1. はじめに

本稿は演劇の舞台の力を論じる。しかし、それは、演劇教育のための議論ではない。我々の関心は、道徳教育にある。

平成 26 年 10 月 21 日に中央教育審議会は「道徳に係る教育課程の改善等について」を答申した。これは、第 2 次安倍内閣において私的諮問機関として設けられた教育再生実行会議の第一次提言を受けて設置された文部科学省「道徳教育の充実に関する懇談会」の提言を踏まえて、中央教育審議会が学校における道徳教育の抜本的な改善・充実の具体的な方向性を示したものである。

27 頁に及ぶ答申のほとんどが道徳の「特別の教科」化の実施に関わる議論に当て

^{*} 高島市立マキノ小学校教諭

られていることから明らかなように、今回の改革プランの焦点は道徳の「特別の教科」化一点にある。道徳の「特別の教科」化はそれほど重大な変更なのである。見方を変えれば、それほど大がかりな変更を必要とする特別な位置に道徳教育を置いてきたのが、これまでの我が国の学校教育だったのであり、その意味をどれだけ踏まえた改革が行われようとしているのか、ただ単に道徳教育の充実（具体的にはすべての先生に道徳の授業をしっかりとやらせること）という目的だけのために、愚かにも無自覚に超えてはならない一線を越えてしまったわけではないことを願うばかりである。

さて、ここで本稿の姿勢を明確にしておこう。我々は、道徳の「特別の教科」化が、自覚的にか無自覚にかはわからないが、我が国の学校教育が昭和中期から平成の今日まで行ってきた道徳教育（終戦後道徳教育）を大転換させる可能性を持ち、その是非を不問にするわけにはいかないことを承知している。しかし、新学習指導要領が告示され、「特別の教科」として道徳の授業を作っていくことが決定した現時点においては、その問題点を指摘するばかりでなく、これまでの道徳の授業の問題点を真摯に反省し、「特別の教科 道徳」の中での道徳教育を、より効果的で、意義ある実践として展開する手立てを検討することの必要も了解している。そこで、今回の道徳教育改革が持つ問題をひとまず留保し、この新しい条件下で行いうる取り組み、行うべき取り組みを検討することを課題としたい。そこで注目するのは《討論》である。

今回の道徳教育改革は、「考える道徳」、「議論する道徳」への転換がキャッチフレーズとなっている。中央教育審議会の答申には、“道徳教育においては、児童生徒一人一人がしっかりと課題に向き合い、教員や他の児童生徒との対話や討論なども行いつつ、内省し、熟慮し、自らの考えを深めていくプロセスが極めて重要である。”（中央教育審議会答申 p.11）とあり、新学習指導要領においても“(4) 生徒が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に討論したり書いたりするなどの言語活動を充実すること。その際、様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方を生み出していくことができるよう留意すること。”（学習指導要領 中学校編 p.103）が指導上の留意事項としてあげられている。《討論》（討論、対話、議論）を積極的に用いた道徳の授業が求められ、《討論》を通じての道徳の学習、道徳性の発達がねらいとされているのである。

しかし、道徳の《討論》は容易ではない。道徳の《討論》は“内省し、熟慮し、自らの考えを深めていくプロセス”を持たねばならず、“様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方を生み出していくことができる”《討論》でなければならないのである。

そこで、本稿では、《討論》を可能とする道徳の授業の条件を確認したい。その手がかりを演劇の舞台の力に見いだすことが、本稿の趣旨である。

2. 道徳の授業において《討論》は可能かーモラル・ディスカッションの限界とジャスト・コミュニティ・アプローチ

道徳教育で《討論》に注目することは新しいアイデアではない。L・コールバーグの「モラル・ジレンマ教材を用いたモラル・ディスカッション」は、すでに現在最もよく知られた道徳の授業モデルとなっている。しかし、日本ではあまり紹介されないが、実は「モラル・ジレンマ教材を用いたモラル・ディスカッション」はコールバーグの初期の道徳教育モデルであり、彼は後にこのモデルを発展的に修正している。もちろん「モラル・ディスカッション」はその後期のモデルにおいても重要な位置を占めており、教授法としての価値が否定されたわけではない。しかし、この修正の意味は重要である。この発展的修正は、モラル・ディスカッションの実践が修正されなければならない授業モデルであったことを意味するからである。コールバーグの共同研究者としてモラル・ディスカッションの実践に携わったアン・ヒギンズは、正直に以下のように述べている。

“これまで、私たちは少数の大規模な高校で仕事をする機会がありましたがその一つにブルックライン高校があります。1975年、モシャー博士とコールバーグ博士が、小学校と高校で道徳教育を実施する計画について、ブルックライン市の教育長に会いました。教育長はきわめて熱心でした。その結果、多くの先生がカリキュラムの一部に道徳的葛藤場面を用いた教室での討論を取り入れました。そして、この高校の選択校である校内学校は、それまでA・S・ニコルの「自由な学校」の考え方を取り入れていましたが、学校経営の問題に取り組む方法として民主的道徳教育によることになりました。

5年後、ブルックラインの学校の教室における道徳討論の実践は下火になりました。特に、高校においてそうでした。多くの教師が、効果がないとして道徳教育を放棄しました。”(ヒギンズ pp.161-162)

つまり、「モラル・ジレンマ教材を用いたモラル・ディスカッション」は、提案されて間もない時点で、十分な効果が期待できる授業モデルではないことが明らかになっていたのである。しかし、この自身が提案したモデルが適合しない現実に対して、コールバーグは安易に自身のモデルを放棄しなかった。彼は、モラル・ディスカッションが効果がなかったのではなく、そもそもモラル・ディスカッションが成立していないと考えた。

モラル・ディスカッションは、ただのディスカッションではなく、モラル・ディスカッションである。この〈モラル＝道徳的な〉という形容の中にコールバーグが込めた特質は、自己と他者を等しく尊重することを要請する「正義」の構造を持つことであり、多様な声を許容する受容的、了解的なコミュニケーションである。コールバーグはモラル・ディスカッションの実践が期待ほどの効果を上げることが出来なかった現実、そうした道徳的なディスカッションが現在の学校や教室ではむずかしいという事実を読み取った。学校は、自他が尊重される民主主義的な空間とはかけ離れた、官僚制的なコミュニケーション空間だったのである。そこで、学校・教室をモラル・ディ

スカッションが成立する学校・教室に変えるプログラムを含む道徳教育モデルとして再提案されたものが、「ジャスト・コミュニティ・アプローチ」である。このプランは、生徒一人ひとりが道徳のディスカッションに主体的に参加することを制約するすべての構造特性を、学校・教室から排除することを求める学校改革モデルである。日本の学校も同様の課題を抱えている。それが道徳の討論の困難につながっている。にもかかわらず、このジャスト・コミュニティ・アプローチが我が国において注目されて来なかったのは、学校改革を伴う授業モデルがそもそも非現実的だからだろう。道徳のコミュニケーションには主体的で積極的な参加が不可欠である。しかし、それを保証する正義の構造を用意することが困難だとすれば、我が国の教室はそれとは別の参加の条件を備えなければならない。そこで本稿が注目するものが、演劇の舞台である。

演劇は有史以来人々を魅了してきた。様々な弾圧の歴史を持ちながらも、絶えることはなかった。そして、TVやムービー、ビデオなどで、劇場に足を運ばなくても演劇を楽しむことができる現在でさえ、舞台（ステージ）は演劇の中心となっている。舞台には人を惹きつけてきた魅力がある。舞台に惹きつけられているのは観客だけでなく、様々な芝居の選択肢を持つ役者もまた舞台に魅了される。そこに参加を可能とする場の条件を探ることができるのではないかと考え、筆者らは11名の若き演劇者にインタビューを行った(1)。舞台の力とは何か、彼等の語りに耳を傾けよう。

3. 演劇に魅了された若者たちの語りから

(1) Aさん

Aは、劇場で、舞台上の役者も客席にいる観客も同じ空間で直接的な空気、台詞を感じられることが魅力だと語る。表現の仕方では映像のほうが好きだというA。舞台では声を張る必要があるし言い回しも特徴的で、動きを大きくすることも多い。それが苦手だと語っていた。普段どおりの演技、嘘のない演技がAの求めるものと言う。それが舞台でされていることで、緊張感を感じられる距離に惹かれた。

(A-1)(演劇より映像って。最近演劇の面白さ。見ることとやることは違う?)そこが役者の壁じゃないですか。見てどれだけ吸収できるか。どれだけ動けるかみたいなのが。(演劇をやっているものを見て、学んだものを表現するっていうこともあるわけ?)バクわけじゃなくて、それに影響されているものがあるはず。今までイメージしていたものが崩された。声の出し方が、普通。嘘っぽいしゃべりがなくて。声の第一声で、これは違うわって、これ絶対面白くないわってわかるくらいのもある。嘘がないって気がする、共感できる。かといって自分がやる、自分がやってどうなるかっていうのがまだわからないし、自分の持っているものにあるのかわからないから、そこはチャレンジ。

見たものは自分の中に吸収され、それをどう表現していくかは自分の力量次第だとAは語る。今までであったイメージが崩されたことで、Aは舞台の魅力を知り、それにチャレンジしたいと考えるようになる。

Y団の演劇論で惹かれたところはどこかという質問では、誰でも見ることができる、受け入れるということが重要だと答えている。実際舞台を1本見ようと思うと、それなりの値段が設定されている。自分がやりたいことを見てくれる人だけが見てくれる

スタイルでやるのが A が求めるものと一致した。表現したいことを曲げることなく伝えられる空間であることが重要になっている。

(A-2) 演劇は自己顕示欲とゆうか、どっかにあると思う。そういうのを満たしてって、自意識が高められる。劇団はアットホーム感と華やかさ。変な華やかさでなくて、永遠にやっていけそうな感じ。そういうのが魅力。

演劇の魅力とは何か聞いたところ、自分が表現したいことを他人に見てもらうことで、自己顕示欲を満たしていき、自分がどうあるのかを考えていけると語った。劇団に所属することはこの先あるのかはわからないが、それに魅力を感じている。「人に勇気を与えられるとか…そんなおこがましくて、考えたことないですね」と語っていたが、自分の中のものを表現したいという気持ちは強く感じられた。続けていこうと意地になっているのかもしれないと言う A だが、「そんなに苦しくない。満足できるものなら許される気がする」とも言っている。表現することで、自分が満足できるものに巡り会えるまで、続けていくのだろう。

(2) B さん

(B-1) 魅力ねえ、自分と違う人になる。自分と違うことが体験できる、疑似体験でも。できるってゆうことは、これしかないよね。それか仕事で嘘つくしかないよね。キャバ嬢とかになってさ、全然違う自分になるとか、そんなくらいしか出来んやん。自分と違うものになるって。それがやっぱ魅力やない？

B は、舞台の上では自分ではないものになり、現実の自分には出来ないような経験ができると語る。魅力として自分ではない人になれることを挙げたことから、自分とは違うものになりたいという変身願望が見られる。舞台に立ち、自分には出来ないことを誰かになってやることで、その欲求が満たされているように感じる。高校時代に男役をすることが多かったのも、変身願望の表れと考えられる。単に男子部員が少なかったために仕方なくということもあるが、高校時代の作品では女役をやることは極端に少なかった。現実では男として見られることは絶対にありえないが、芝居の中では自分は男だと言えば男になれるし、魔法が使えると言えば使えるのだ。舞台上では、可能性は無限にある。

(B-2) 役者としての魅力は、単純に前に出て自分と違うものになって、やりたいことができる。ほんまにだって、直接表現やん。生きる！ってゆう表現を、たとえばな、そういう題材を使ってやりまーすって言ったら、直接表現やん、役者は。とか、ほんまに自分じゃない自分を見せることができる。でもそれが自分かもしれんやん。普段自体がまず虚構。これ自体がまず虚構やん。ってゆうのをずっと考えて生きてる人やから。ってかそれすらわからんくらい普段から演じてるわけやん、みんな。基本なんかどこにあるんかわからんし、基本があるのかすらわからんやん、みんな。一人でいるときも、可哀想な自分であったり、優しい自分であったりをつくってるやん。つくってると思ってるか否かはおいといて、絶対つくってるはずなん。それをつくらない人ほど魅力的な人はいんと思う。で、つくってる自分を、もしかしたら舞台では自分のままで出来てるかもしらん。でもそんなんわからん。そういうわからんことを、やってる、のかもしれない。

普段から演じているという認識はあるが、演じているのか演じていないのか、また、どれが素の自分なのかがわからなくなるくらいに演じ続けていると言う。舞台に立つことで、そこに立っている『自分』を見てほしいという感情はあるが、それは普段演じているいくつかの自分の中のひとつであり、実際には自分自身を見てほしいという感情が含まれると考える。役者を続ける理由を聞いたときに以下のように述べている。

(B-3) なんやろうなあ。すごい難しい質問やけど、続けるしかない。続けてたら、どうにかなるだろうって、漫然と続けてるところも、ゼロじゃない。(中略) 続ける理由か。続けてたらなんか変わるかもしれないって。続けることがアイデンティティ。続けていることが私であること。人間は考える草である。我思うゆえに我在り、みたいな。役者をしていることによって、私が見える。私の人格が見える。役者とゆうか芝居。結構考えてるんだよ。やってる側はいいんだよ。みんなが深く考えてくれってわけじゃなくて、見てる人に考えてくれってわけじゃなくて、私自身人生かかってるから。人生を深く捉えるならば、やってることによって私が見える。軽く人生なんてって捉えるならば楽しいからやってる。単純にいろんな人になりたい。

やっていて楽しいという気持ちはもちろんあるが、それだけではない。続けることによって、自分の存在が確立していくとBは言う。芝居を続けていること自体が居場所になっているのかもしれない。演劇、芝居をいうものがBの中で大きなもの、もしくは生活の中心として存在している。舞台に関わることで人脈も増え、様々な人とつながり、演劇をするBをまわりが認識することで、Bは存在意義を見出しているようにも感じた。演劇に「人生かかってる」というからには、それほどの思いがないとできないのかもしれない。しかし、それほどまでに芝居に執着を持っているように見えるBも、演劇を辞めようと思ったことはある。それでも現在も続けており、次回公演もすでに決まっている。公演のたびに、つらいことや嫌なことはたくさんあり、とにかく乗り越えなければならぬと追われている生活が続く。気を張って少々が無茶を繰り返す毎日が続くせいか、終わった途端に体調を崩すことも少なくはない。そんな日々から開放された途端に、もう次の公演のことを考え始める。「続けることがアイデンティティ」とBは語っていたが、そんな生活が人生の中にあることが彼女にとっては当たり前のことなのだろう。辞めてしまおうという思いを上回る、またつくりたい、立ちたいと思わせる舞台の魅力とは、何か。生であること、ある種の緊張感を肌で感じられること、五感すべてで感じられることに加えて六感の部分もあること、そして汗のかかるほどの距離感。舞台に関わってきたからこそ、様々な魅力に触れ、そして惹きつけられていることがわかる。

(B-4) 見て、違うものを得られるやん。映画も舞台も、人と接することと一緒に、自分と違う考えをダイレクトに受け取れるやん。それがもう、まず面白い。で、美しさもある。視覚的、聴覚的、感覚的に。美しさもある。舞台は生やん。生の魅力…何が起こるかわからないハラハラ感を共有できる。それは確実にそうやん。暗にみんな思ってると思う。舞台観に行ってる人はなんも思っていないフリして、暗に生やからなにか起こるかもしれないって部分を持ってると思う。その絶妙な魅力に反映されてると思うよ。生の魅力。映像では、より美しさは表現できるよな、洗練された。生やからこそ、汗、匂い。劇場の匂いやったり、照明をたくことよっての空気やったり、汗のにおいやったり。お客さんの隣のにおい、とか全部が。匂いの記憶ってみんなあるやん。この匂い嗅ぐと学校思い出すとかさ。この匂い嗅ぐとあのころ思い出すとか。香水つける理由にもなるしさ。この香水はあの男思い出すとか。そういう魅力もあるんじゃない。あと、六感の部分。劇場って不思議な空間やん。なんかもやっとなんかがいそうな感じ。その六感も大事やと思う。その感覚は映像ではなかなか見つけにくいと思う。スタジオも結構あるやけど、そういうの。そのスタジオの匂いを、同じことをやっても舞台では同じように体験できる。うちらも体験できてお客さんも体験できる。そこの魅力じゃね。私は汗の魅力が一番やと思う。お客さんにかからんばかりの汗と、つばみたいな。その魅力、距離。距離もあるね。映画の俳優さんにさ、この距離でやられたら、そりゃ魅力感じるやろ。それを舞台は、映画の5倍金を払って、観に行くわけやん。

(B-5) (今後役者として目指すものは、目指すところは?) 藤原竜也。あと小林賢太郎。なんやろな。唯一無二。役者になりたい人はみんなそうやと思う。唯一無二の存在。自分じゃなきゃいけないってゆう理由がほしい。みんなそういうところがあると思うんよ。スタッフは誰でもいいわけよ、その作業してくれたら。役者も、それをしてくれたら誰でもいいけど、一回やっちゃったらその人やないとかかんやん。それがほしい。目指すところ、って、大きな舞台に立ってみたい。どうせなら。どうせならトリプルで拍手浴びたいなって。カーテンで何回も出てみたい。それはZでやることじゃないけどね。ドラマシティよりでかいところ。梅田コマとか。東京やったらコクーンとかさ。シェイクスピア劇場とか、蜷川さんがシェイクスピアやるために建てた劇場に立ってみたい。帝国劇場とか。グローブ座とか、海外にも行ってみたい。役者として。演出家としてでもいいけど。映画にも出てみたいし、テレビもいっぱい出たい。相棒に出たい。あと2年か3年待ってくれたらあそこまでいけるかもしれん。何があるかわからんやん。だって来月にはテレビばんばん出てるかもしれんやん。10年後かも20年後かもしれんけど。(可能性は無限大だね) 可能性はおもしろいよね。未来が全然見えへんやん。私はそれがすごい楽しい。毎日お金の心配をしながら生きていたい。お金の心配はしたくないで、できればね。やけど、どうせ生きてるんなら、毎日同じことをしてってのは私は無理やから。安定した暮らしの何が楽しいのかわからない。どうせ死ぬやで、みんな。どんなかたちであれ。絶対死ぬやから、好きなことやって、好きなだけ遊んで、好きなだけ罵声も浴びながら歓声も浴びてたいやん。

「唯一無二の存在」になりたいという発言は「続けることがアイデンティティ」同様、演劇の世界で自分の存在を認められたいという欲求が見られる。そして、毎日同じことをし続けるような縛られた生活よりも、困難であっても自由に好きなことをする生活をしていきたいと言う。他人に認められることと、自由であることがBの中では大きな魅力になっている。

(3) Cさん

Cは現在P市で劇団Qの主宰をしている。舞台に立つことは好きだが、それよりもみんなで作っていくということを大切にしている。P町で最初に手伝うことになった手作りミュージカルのやり方が合わなかったと言うC。そのときの思いが、現在プロデューサーとしてあることに影響を与えている。

(C-1) 演劇はね好きじゃないと思いつながら演劇やってるんですけど。(中略) 嫌いだから続けられてるってのもあって。そのミュージカルも、なんか違うなーって。だって素人が集まってするお芝居なので、あの、僕がかかわってやろうとしているのは、今もそうなんだけど。プロの方としようと思ってるわけじゃなくて。でもなんかこう、やってることはみんなプロの劇団と同じようなことを、稽古だったりをしているので。でもそれってたぶん本当に舞台の上ですごいなーって思える舞台ってつくれないんじゃないかって思って。だってプロって、やっぱり毎日毎日何時間もやってるわけで、それを同じようなことを少ない時間でやっても、たぶん舞台の上では同じようにはできないと思う。それだったら、もっとみんなが持ってる持ち味を出せていけたらなって。観に来ているお客さんたちも、みんなが輝いてる姿を見て、なんかこう、人によっては勇気だったりとか、きっかけになったりとか、単純にすごいなーと思うものになったりするんじゃないかとか思って。それで、演劇ワークショップってゆうのをやりはじめたんです。台本を用意しないで、とにかくみんなが持っているものを出して出して。それをまとめて1つのお芝居にする。ってゆうのをやりだすきっかけになった。

商業演劇のような作品として綺麗に仕上がった舞台を目指すのではなく、劇団に関わる人々の個性や持ち味がいかに出せるかということを考えている。主に所属する子どもたちが自由に表現を楽しめたら、ということにこだわっており、ワークショップでは自分の身体の動きを感じることや、身体を使って『物』を表現することなどを繰り返している。子どもたちの持つ世界観を大切に、音楽を聴いて浮かんだイメージを物語にしたり、お題から物語をつくりだしたりと、書くことにも力を入れている。そこかしこにある演劇を嫌いだと言い、自分の求める演劇をつくり続けるCの、舞台の魅力とは何だろうか。

(C-2) 舞台って、役者もそうだし、音響、照明。全部含めて、そのときのかかわってる人たちのリアルなものが集まってくるってゆうののおもしろさがある。毎回毎回だって違うじゃない。同じ公演でも。そのときの自分のコンディションだったり、気合の入れ方だったり、なんかそのときの工夫だったり。そのときのリアルなものが、そこに集まって、できあがっていくののすごさですね。そのとき限りですもんね。それが舞台の魅力ですかね。(中略) 世の中に完璧はないしね。そのときの、その人のその瞬間のものが、そこにかかわってる。みんなのものが一つになってるってゆうおもしろさだと思いますよ。だからそうゆう意味では、ひとつひとつが、逆にいえば完璧かもしれない。そのとき、そこでできたものは、ほかではできない最高のことだと思うし。だから、完璧じゃなく、完璧じゃない完璧さ。なんかよくわからないけどね。そのときのものはそのときの瞬間にみんなで作れるのがいいんだろーな、たぶん。うん。

そのとき限りであること、そのときにしか出来ないものをみんなで作れることが魅力だと語る。舞台に立つことよりも、その瞬間の仲間たちの輝きを魅力だと感じているように思う。役者をして、自分が舞台に上がって演技をして、自分がそこで認められることよりも、仲間と一緒につくってきたものを見せることが出来る場がCにとっての舞台だ。その中で、子どもたちとつくるということも重要になっている。子どもが持つ自由な発想を引き出し、形にしてどれも無駄にしない。ワークショップの中で作文を書く時間があり、1回につき3～40分程度だが、その場に来ていた子どもたちはさらさらと用紙いっぱい自分の言葉を書き続けていた。自由に、どんなことでも書いていいという安心感と、自分が生み出したものがみんなで作る舞台につながるということが大きいのではないかな。表現することの楽しさを知ってほしいと

いうことがCの中にはある。

プロデューサーとしての仕事と舞台美術のほかに、役者として少し舞台に立つこともあるC。舞台に立っているときのことを聞いた。

(C-3) 自分として立ってるのもあるかな。わかんないよね。自分が役者として売りたいと思って立ってる人は、お客さんの注目浴びたりとか、舞台に立って自分をアピールしてるのが、力になるだろうけど、そういうことじゃなく立ってるんで。そこに立ててることに対する気持ちよさなのかな。

「そこに立てていること」というのは、みんなでそれまでつくってきた舞台が観客に見せることが出来て、その中に自分が居られるということを表している。人前に立っていて、自分が見られているということはあまり考えていない。それを感じるのは役者として舞台に立つ子どもたちであり、これから先もしかしたら役者を目指していこうとする子たちだ。

Cは舞台が毎回変わっていくことがおもしろいことであり、魅力だと考えている。そのときに起こるすべてが舞台にとって良い影響を与える。それは映像では味わえないものであり、舞台であるからこそその魅力である。

(C-4) 映像だと、映像に残した時点で、なんか記録になっちゃうような気がしてね。だから、そこでほんとに演劇だったらほんとに台詞とか音もそうだし、空気を震わせてお客さんにじかに伝わるじゃない。だから、根本的に違うと思う。つくってる作品のよしあしで言ったら、どっちも同じなんだけど、伝えるものとしてはまったく違うものだね。メッセージ性はね、同じだと思う。うん。一緒だと思う。だから、ほんと映画だとたぶん記録ってゆう要素がすごく大きいと思うんで、つくりこめるよね。うん。芝居ってなんかつくりこめないじゃん。役者がそう出てくるかとか。どうなるかまったくみんなわからないね。

記録になった時点で、それはCの求める演劇ではなくなる。やはり観客に直接伝わる、生であるということが重要な要素である。そのときにしか味わえない役者の感情や表情であったり、音響や照明のアドリブやそれぞれの重なり具合であったり、それらが混ざり合った一度きりの瞬間が、Cがつくりたい舞台だ。つくる側としての舞台はそうであっても、役者として演じる子どもたちには表現する場としての舞台を提供している。舞台に関わらず、今の子どもたちにまず体験、経験してほしいことはどんなことがあるかを聞いてみた。

(C-5) 何か感じるのが大事だと思うんで、それが1つの表現方法だし、それが絵でもいいし。そうだね、その部分での制約が一番大きいんだろうね。思ったり考えたりしてもそれが出せない。それだとね、やっぱりストレスがどうしても溜まっていくんだと思う。(中略) 1つはね、やっぱり人の身体って、つかってない機能がすごくあったりとかがいっぱいあると思うんで、自分の身体に興味を持って、関節の動き方とか、筋肉だとか。指を動かすってどうゆうことなんだろうって、こんな風に動いてるんだ、って。あんまりね、普段生活してたらそんなまじまじと見たり感じたりしないと思うから、そういう些細なことの発見？息ってこうゆうふうにしてるんだーとか。いろんな自分の身近な身体のことを、気がついた感じたりする。まわりの植物とか見ても、ひとつひとつ形が違ったりとか、葉っぱがどうしてこんな形になっていくんだろうとか。なんかいろんなことに興味をもって。鳥ってなんであんな形をしているんだろうとか。

まずは一番身近な存在である自分の身体を知ってほしい。そしていろんなことに興味を持ってほしいということだった。演劇というのはそれが出来る1つのツールにすぎないが、自分が考えたものを出せる場としてあることで、その部分のストレスは減らせるのかもしれない。もちろん他のことでもできると考える。しかし、Cが言うように、演劇は一緒につくる仲間がいて、それぞれがいるからこそ出来上がるものがある。そしてそれは唯一無二の作品になる。いろんな話をさせていただいたが、戻ってくるのはやはりそこだった。

(4) Dさん

特別支援学校教諭をしながら、Sという劇団を主宰しているDが、演劇を始めたときに舞台の魅力として考えていたのは、そこに立っている自分が目立てることだった。

(D-1) 演劇ってゆうのは、協力する人たちが、幅が広ってゆうのかな。それはとっても大切なことで、演劇の魅力のひとつかなって思う。うちの劇団にもね、音響さん照明さんとかじゃなくてね、最後には心の友って人がいるの。気持ちの支え。(中略)ひとりが頑張れば頑張るほど、その団体の価値があがってくのよ。いい芝居になるから。だからやりがいがあると思うな。ひとりひとりが頑張りがいがある。あいつがあんなにやるんだったら俺もがんばろうとかね。そうゆう相乗効果もうまれる。やってはったらわかるように、普段稽古してるところに、衣装があがりましたって、衣装がきて、衣装を見たときにそれがすごい良い出来やったらやる気でするよね。

学生時代は自分本位だったと語るDだが、劇団を続けていくうちにまわりから与えられる影響に気づく。舞台は様々なスタッフの力でつくられるものであり、自分が目立つことが重要であるという考えは少なくなっていく。劇団の中に「心の友」という役割をつくり、音響や照明や製作など、主立った仕事ができなくとも、その人がそこにいてくれることによって、舞台に何かしらの影響が与えられているという考えを持つ。「仕事は出来なくても、劇団に関わりたいという気持ちが有難い」とDさんは語っていた。誰かが頑張ることで、まわりにもいい影響を与えていく。Dさんの中で、舞台をともにつくる仲間の存在が大きな意味を持ち始める。

(D-2) 協力できるってことと、やっぱり舞台やるってことが、晴れの日やね。自分を表現するなり、そうゆう場がちゃんとそこにあるのが大事みたいやね。人が何をしてくるかいつもみんなわからないのが毎日続くんじゃないって、あるときこいつが急にばーんとかやっちゃうとか、それがね、ええことなんだなあって思うんだよね。何がええのかはよくわからないんだけど、しかもそれが、自分ができなくても代表でやってくれたら、それが自分の代弁者となり、それで自分の気持ちが吐露できるような、すっきりするような、カタルシスというやんか。感情吐露というか、それが演劇にはあるんやね。(中略)芸術っていうのは魂の浄化ってゆうか人間の浄化ってゆうか、綺麗になっちゃう。こう、排出するとうるか自分をリセットする、そうゆう効果があるんじゃないかなと思う。だから、演劇を習ってないのに、演劇しようってなるのがまかりとおる。音楽でもなんでもそうやと思うんやけど。演劇は魂の浄化と、みんな協力できるものってゆうのが、1番の魅力かなってゆうのに、僕はやりながら気づいてきたかな。

仲間との協力と、そして晴れの日として舞台が存在し、そこで表現することができるのが魅力だとDは言う。日常では自分が注目されるような場所はないことが多い。不特定多数の他人が、自分の行動を認識してくれる場面はそうないと考え、その

日常の中に舞台という非日常があることで、解消されるものがあると思う。また、自分の中にあるものが、代弁者によって語られたときに、自分が言ったわけではなくてもはっきりすることがある。これは見る側にも感じられることだと考える。観客よりも、ともに舞台をつくってきた仲間であれば、その感情はより大きなものになるだろう。「魂の浄化」と言われているが、これは自分の中にあるものを、芝居であれ音楽であれ様々な方法で表現し、外に排出するという意味が読み取れる。感情吐露という部分では、演劇では直接表現が出来ることから、一番適しているように思う。そういった効果が演劇にはあるのかもしれない。

(D-3) 俺は5割くらいしか考えてないから、つくろうぜーってなったらみんなで化学反応起こしてほしいから、その場その場で反応して、あの人がパーンとしたことに反応して、俺はこんな感情になっちゃったよ、だからこんな台詞言っちゃったよ、ってゆうふうにどんどん発見していこうぜって。だから演出家の思うとおりになってますかとかは考えなくていい。そこに足枷をはめなくていい。(中略) 演出家のためにやってんじゃないもん。自分のためであり、観客のためであり、ためって変やけど。全世界に立つためにやってるんやから。やってんやから、誰にも媚ずにやってほしい。演出家の思い通りになんかなくていいから。そうゆうふうに考えないで、やっていくうちに「あーそうやなー」って思えて、言い合えるようになればいいな。俺もすごくいいと思うわーって役者も演出家もお互いに言えるようになったらいいじゃねえかな。そうするとお芝居やってても、変に足枷になるんじゃないくて、自由に泳ぐようにお芝居できたら気持ちいいし。役者にはそうなってほしいな。(中略) 自分の演出ってゆうのが一番だと思ってたけど、違うなと思って。役者が動いて、そして反応して起こることがおもしろいってことがわかったの。これは発見やったね。目から鱗が落ちたね。それはでは自分が自分かと思ってたけど、どうもそれは面白くないなって。いくらやっても自分が考えてる範囲にしかないのが、半分みんなに任せた時点で、面白くなって。自分が思ってたよりよくなってね、やっぱり人を信じるってことはやらなきゃいけないなって。変わったね。それは今もずっと一貫して。

Dは最近では演出がメインになってきている。稽古の中で起こる役者同士の芝居の化学反応を楽しむようになったとDは語る。脚本を担当することもあるが、今は役者がしたいという欲求はかなり減っている。演出家をメインにしていこうと思ったときは、脚本のすべてにおいて演出を考えてきていた。やっていくうちに、役者を信じることで芝居はもっとおもしろくなることに気づく。それまで100%考えてきていた演出を、70、50と減らしていき、稽古場でみんなで作っていくことを多くしていった。役者が自由に動くようにすることで、一人で考えるものより、役者や演出家と一緒に考えて、動いて、化学反応を起こしていくことで、一人のときには思いつかなかったようなこともつくり出すことが出来た。こういった部分のおもしろさは、魅力としては語られなかったが、演劇を続ける理由の1つになっているように思う。

何年後かにまた役者に返り咲くと言っているD。舞台に立って他の役者たちと戦いたいと話していた。過去に出た芝居の中で、好きだった役を聞いた。その人物は、ある事件をきっかけに、自分とはなんなのかということを考えはじめ、自分が本当にしたかったことに気づき旅に出る。

(D-4) そんな人になってみたかったとゆうか。自分の願望でもあるんだと思うけど。そうゆうことだよ、お芝居ってのは。自分の願望を形にしていけるものであって。それが浄化になっていくんだと思うんだけどね。

好きだった理由を聞くと、現実で果たされなかった願望を、芝居の中で形にして消化していくと語った。「浄化される」ということがここでも使われている。自分が現実では出来なかったことを代わりに舞台上でやることで、その思いが浄化されると考えることができる。

最後に、演劇の魅力とは何かという質問を試みた。最後に語られた魅力は、舞台に立つことで自分が人に認められることだった。舞台は彼に、生きていてもいいんだというメッセージを送り続けてくれているのである。

(D-5) 人の前に敢然と立つことができるのがうれしい。自分を見ろというのは次で。何が魅力かって言ったらやっぱり人に認められるってことなんだろうな、きっと。(中略)自分がちゃんとみんなに見てもらえるときがある、みんながこっち見てくれてってゆうのがうれしい。それが自分を満たす、満たされてるってゆうのがあるんじゃないかな。よく教育の現場で言われてる、認め合おうみたいなね。認めてもらうことで、自分が存在する意義ってゆうのかな。俺はいてもいいんだなここに、って。俺は生きててもいいんだとか。お前みたいでなくてもいいって言われるような世界はいやだなんて思うね。

(5) EさんとFさん

EとFはCが主催する劇団Qに所属している。EとFには質問項目を送ってメールで回答してもらっていたが、インタビューができることになったので、メール内容をふまえてEとF同時にインタビューを行なった。以下、メールの内容も引用しながら解説していく。

劇団Qは、上で書いたように演劇ワークショップを繰り返して、みんなで脚本をつくっていくスタイルの劇団である。Eは今までのほとんどの公演に出演して、主役またはメインキャストになることが多い。Fは、入った時期が遅く活動自体は2年ほどだが、メインキャストに置かれることも多い。2人に、今までやった役で、好きだった役とその理由を聞いたところ、Eは、素の自分に一番近かったという役を挙げた。自分に似ているのに、自分には出来ないような冒険をしていて、もう一人の自分が違う世界で生活しているような不思議な感覚が好きだったと話す。自分に近いキャラクターでも、「自分と全然違う生き方」をしていることが重要であるようなので、自分と違う何かになりたいという変身願望は高いように考える。

一方、Fは絶望の小説家という設定だけを与えられ、性格や見た目などを全部自分でつくることができるキャラクター『シュンジ』をあげた。Eとは逆に、自分と正反対の性格だったことが好きな理由だと言う。普段ではできない、例えば悪役のような役をやってみたい、自分とかけ離れた役になってみたいと話していた。このことから、変身願望を持っていると考える。また、Fは友人たちと女装をしてみようと企画をして、そのまま遊びに出かけたことがある。女性の真似がしたかったわけではなく、何かおもしろいことがしたかったと話しているため、常に生活の中に刺激を求めているとも考えられる。周りから見られる自分がおもしろいものであることを望んでいる。一方で、どんな役者を目指すかという質問には、「見てよかったなって言われたい。頭に残る役者。劇が、というより俺が残って欲しい。」と答えている。舞台に立つ自

分が、観客に認められることが重要だと考える。そして、観客に影響を与えられる、考えさせられる芝居をしていきたいと語る。

(E-1) なんかいいな、って思われたい。芝居の中で思い返したときに、最初に出なくてもいいから、いたよねって。出来れば前のほうであってほしいけど。ぎりぎり落ちそうやけどぐっとつかむような。主役じゃなくても、いてくれてよかったって言われる脇役でありたい。主役がいいけど。メインのキャラにしてみらうことが多くて、脇役にまわったとしても、自分が主役っていうのが前面に出てしまう。それをなんとか克服したい。人をたたせるってゆうのができるようになりたい。支えたい。

舞台に立つ自分を見てほしいという思いは、F と比べると少ないように見えるが、主役であることに執着を持っているとも見られる。あまり脇役をやった経験がないことから、それに憧れている部分もある。憧れる俳優とその理由を聞いたところ、主役というよりも脇役であったほうがキャラが立つ人ばかりだった。「自分が主役」という気持ちが大きすぎるのがEさんにとっては、直さなければならないところだと語っていた。

(F-1) 素ってゆうか、役を演技してるってゆうより役になってるから、その舞台が現実世界で、見ているほうが俺にとったら別の世界。演劇してる間はこっちが現実。演じてるっていうより役自体、かな。

普段生活している自分がいるように、舞台の上でもその役が生活し、そこに存在するという。自分が演じているという認識よりも、その役がいると考えている。舞台上には普段の自分はどこにも存在していない。観客から見た非現実の世界である舞台の世界は、F にとったら現実世界になるのだ。芝居ですんなり役になれるように、普段の生活で演じていることはないと話してくれた。どんなときでも素の自分であるようにしている。

(E-2) 演じるっていうか、人によって見せる面が違うって意識のがある。作ってるっていうより、自分の中のどっかの面を見せてる。F には余所行きの面は見せてないけど、バイト中は余所行きの顔しか見せない。

E は普段の生活では演じているという意識ではなく、自分にはいくつも面があると認識しており、人によって一番合った面を見せている。自分の中にいろんな種類の自分があるわけではなく、一人の自分をいろんな見せ方で見せているということになる。

(E-3) (舞台の魅力は?) アドリブ! 一発勝負。本番の舞台が終わったあとはダメ出しじゃあれん。だから好きなことができる。自由に。それにかけるしかないし、練習でうまくいってなくても、本番運に運が重なってうまくいくかもしれんし。演じること自体が好きだから表現するって意味では一緒だけど、演じるうえでの一発勝負がいい。

C と同じように舞台は一度きりであるものだと挙げているが、言い方に違いがある。C の場合は見る側、観客の目線から一度きりであることが魅力だと言っているように感じられた。しかし、E は演じている側、役者としての一発勝負が魅力だと言っている。それでも2人は同じように、その魅力は演劇にしかないものだと考えている。見る側でもつくる側でも、一瞬の輝きのようなものに惹かれるのだろうか。

(E-4) 稽古場はあせなあかんってのが多い。本番は割と自由。そんなことにとらわれてるくらいならって。演出の枠の中でやけど、言われたことも聞きつつ自由に。ダメだしをされて出来ていったものが、本番でもうちちょっと出るかんじ。広がりダメだしに合わせて狭まっていくけど、最後にまた広がる。

また、舞台の魅力として自由であることも挙げられる。ワークショップの段階では、みんなが自由にやっているイメージがあったが、脚本が出来上がって稽古になると、多少の縛りが出てくるようだ。その分、本番の舞台上では自由だと感じる人が多い。演出が決めることはしっかりとあって、その範囲では自由にできる。狭められていったものが、舞台という自由な空間でまた少し広げられるのだ。

(F-2) 稽古のものが本番前に全部忘れて、ステージに出たら俺の世界になる。自分が主役ってゆうか。ストーリーを進めながらも好きにさせてもらう。何にも縛られない。

FもEと同じように自由を感じているが、よりそれが大きいように思う。その自由な空間を楽しみ、自分のものにしている。現実の世界での縛りつけられているという意識が強いのかかもしれない。高校時代に反抗的だったが、芝居をやり始めたことで少しずつ変わり始めたという経験も、これにつながっているのではないかと考える。学校の中では、Fにとって縛り付けられていると感じるものはいくつも存在していて、そこで溜まったものは舞台に立つことで消化されて、自由であることを感じられていたのではないかと考える。

(E-5) 声優を選んだのは、声優専攻と俳優専攻選ぶとき、声優や舞台活動もできるし。能力さえあればなんでもできるし、こっちにした。努力さえすれば。歌手活動もしてる人いてるし。

こう語るEは、専門学校で演技の基礎から叩き直してほしいとも言っていた。芝居を仕事として続けていく決意をし、声優の道を選んだ。舞台だけにこだわらず、表現することや大勢の人に見られることを続けていくのだろう。今後様々な場面で活躍することを期待している。

2人同時にインタビューをしたことで、お互いに発言にいろんな反応をしていることが感じられた。それは違う、それはわかるなど、同じ劇団で活動していても感じ方は様々である。2人に共通して見られたのは、舞台は自由な空間であるという認識だった。

(6) Gさん

Gが演劇を始めたのは、小学生の時に始めた音楽活動が続けるために入学した養成所でたまたま演劇コースに入れられたことがきっかけだった。音楽を続けながらとりあえず演劇もやっていたら、何かで音楽とつながるだろうと考え、通い続ける。

(G-1) 生の怖さを、面白さを知って、舞台おもしろくなってなっちゃったんですけどね。これはなんだってゆう。うまくいかなかったときの感情も達成感ってゆうか、そうゆうのがあって。養成所には残る気がなくて、舞台面白かったからそこからいろいろ見てまわったんですけど、23 くらいのとき。たまたまこの芝居を見て。なんだこいつらは、と。序盤から、なんだこのテンションは、と。基本青筋たってる。馬鹿な話なのに、でもこの人らはプロやなと思った。大阪公演をしはるのも見に行って、いても立ってもいられずに受け付けにいた団員に声をかけて、入りますって。

初舞台となった卒業公演は全部で 4 回公演。1 回目は上手くできたことが何故か 2 回目ではできなかった。生であるからこそ、そのときの誰かの状態によって舞台全体の空気が左右される。G はその怖さを、おもしろさだと捉えた。そのときに起こるハプニングですら取り入れていく強さをこのときから持っていた。その後、S と運命の出会いをすることになる。そしてその勢いに乗ったまま入団し、10 年間続けている。ここまで続けられている理由はなんなのか。

(G-2) 続けてる理由は演出の D さんに惹かれるものがあるから。最後にあっと思わせる演出があるから。本だけではどうなるんやと思ってても、役者が動くことでこうなるんか、って。役者はとりえず本番あけるまでは舞台美術とかやってなかなか台詞覚える暇がなかったり。でもなんとかなる。

S で作・演出を手がける D のやり方に惚れ込んでいることがわかる。それだけではなく、S に所属する役者が脚本を読んで考えて動き、D が言ったような化学反応を起こしていくことに惹かれている。本がなかなかあがらないと愚痴もこぼしていたが、それでも続けられるのはそれだけ魅力があるのだろう。また、それが当たり前になりすぎて、遅くなったとしても役者それぞれがこなせる自信があるからだ。

(G-3) 化学反応を求め合う部分ですかね。演技に限らず、美術・照明しかりやと思うんですけど、たぶん稽古しながらつくっていくことが多いですね。だから演出もこっちのほうがおもしろいとか、発見しながら。これでいこうって結構変わったとか。

S の演劇の魅力は何かを聞いたところ、D 同様に「化学変化」という言葉が出てきた。脚本家、演出家が作品の流れをすべて確定してしまうのではなく、劇団員みんなが「発見しながら」つくっていけることが S の魅力であり、劇団 Q とはまた違った、みんなで作る脚本だ。舞台そのものの魅力は何か聞いてみた。

(G-4) やっぱり、終わってからのカーテンコールが 1 番やと思うんですよ。お客さんがいてなんぼやと思う、それはこんなちっさい場所でもおっきなホールでもあるんですけど、とりえず見ていただいて、いかに来さそうとするか。あんま我が我がじゃなくて、出しすぎるとだめなんですけど、うまくいかないときもあったりするんですけど。お客さんの空気ってゆうか。最初のころは出ることで精一杯やったんですけど、最近はお客さんの空気を感じるってゆうか、反応をうけて、うちはアドリブとかもオッケーはオッケーなんで、お笑いとかもそうかもしれないけど、なんか乗せられるとか。そういうような部分じゃないかな。そこがやっぱ生ものやなってゆうか。すごい舞台にその初めてやったときに、1 回目うまいことできたのに、2 回目あんなことになるとか、そこだと思うんですよ。まあ終わったあとの反応で、反省点もあるときもありますけど、充実感とか。

客席との一体感や、生であることが挙げられた。そしてやはり、観客に見てもら

ということが一番に挙げられている。そして、その上で観客の空気を感じてさらにアドリブを入れていく。そこにある空気はそのときにしかないものであり、そこにアドリブが入れられるかどうか、その場に起こるいろんな要素がかかわっている。それらすべてを取り入れて、より良いものにしていけることがGの言う魅力なのではないか。(G-1)でも言っているが、うまくいかなくても達成感や充実感を得られる。完璧はないものだから、何かうまくいかないことはどこかしらに出てくる。それでも、次に活かしたり、改善させることはいくらでもできる。それよりも一公演を切り抜けた達成感を得られることは大切だ。

(G-5) 一人ではね、伝えたいって思っは立ってないですね。意外と冷静で。こないだの一人芝居のときは別ですけど。Sのみんながいて、一駒やって思いがあるんですよ。役者ってね。それが、ひとつひとつがぴたっと合ったときに、観客に何か響くときもあるやろうし、ただそれが、狙っていつもそこにむかって出せればいいんですけど、総合的に伝えられればいいなとは思いますが、一人ではそんなもん、伝えられるかかって思ってるんですけど。自分がまったく関係ない、伝えるのに直接かかわらない役やったら、いかに目立ってやるか、あいつはなんだったんだって思わせてなんぼってゆうのがありますね。キャラによってですけど。最近ちょっとメインの役ばかりやっていると、ちょっとそういう役もやりたい、はっちゃけたいですね。どう伝えたいかが難しいですね。

ここで出てきた「いかに目立ってやるか」ということは、舞台で観客に自分を認めてもらいたいという感情の表れだと考える。メインキャストだと、脚本の中で伝えなければならないことが多く割り振られている。それが続いていくために、まったく関係ない役をやりたいというのは、ある意味縛られたものから開放されたいと考えている。自由にできるということもあるだろう。自分は舞台の一駒だと言葉にしたことで、仲間がいるからこそ成り立っているということが感じられる。劇団の仲間がいるからこそ、伝えたいことと関係のないところでは本気ではっちゃけることができる。自分を感じることはあるかという質問では次のように応えている。

(G-6) 本番で、ですか。結構そのキャラによって、そうするときとならないときがありますね。稽古のときは、全体とのバランスとか、特に群集劇のときとかは、客観的にみてる、自分はここで演技してるんだけど、こっちから見てる自分がいるようになってきて。今ここにいてこっちは動かなあかんとか、このあと台詞あるからこっちに、みたいな、そういう稽古やりはがら全体を見たりしながら動いたりしてますけど、本番のときにはそんな考えては。だから稽古で身体に入って舞台立ってって感じなので。本番中に客観的にみるとかはあんまないですけど。入り込むかどうかってゆうのは役ってかそのシーンによってね、変わりますね。シーンでも、ここぐつつかみたいとことか、あったりますし。最近自分たちの劇団だけで公演するってゆうのが難しく客演の人に出てもらったりがあるんで、ついそのほかのことが気になってしまったりすることがあるんですよ。次の段取りとか、人の出入りが激しかったりするので。いらん気をつかっちゃったり。そういうところはありますけど。

稽古中には冷静に場の動きを見ている自分が常に存在している。相手が動けば流れも変わっていくので、臨機応変に動くためにそれは存在する。しかし、本番では、稽古場で動きなどは身体に染み付いていくので、演じている役を客観的に見る自分はその中にはいない。それでも次のことや出はけのことを考える自分がある。Gの場合、稽古場であれ本番であれ、演技をしている自分ではない、何かを見て考えている自分が

同時に存在していることになる。

人によっていくつかの違う自分を見せる、というわけではなく、仕事場と劇団関係とではまったくの別人の2人を演じている。仕事場の人が舞台を見に来てくれたときに、普段と全然違うと言われてそのことに気づき、それからとことん変えていったと言う。その人にはどちらの面もあることがばれてしまっているのだから、2つの自分を切り離していく必要はないように思うが、そこに「面白さ」を求めるのならばそれでいいのだろう。2種類の自分を日々使い分けて生活しているG。

基本になるその状況を楽しんでいる自分に、みすばらしい格好の膜を張ったり、芸名の自分の膜を張ったりしているという認識だが、それぞれをそこまで意識しているわけではない。こうゆう風に見られているかもしれないと考えて、少し「ものは羽織ろうみたいな感じですかね。かまえるとゆうほど、はないかもわからないですね」という程度だ。普段の自分に3パターンがある则认为るGだが、普段の自分と芝居してる自分とに違いはあるのだろうか。

(G-7) 違いはもたせようと思ってますね。ただ、ほんまの素の自分を知ってる自分自身は、振り返ると、そうでもねえなあって。変えんとあかんのに変えきれてねえなあってとことがやっぱり。そこが課題かもわからないですけど、変えることがいいのかどうなのかってゆうところは、わからないですけど。僕は無理にかえる必要はないんじゃないかとは思ってますけど。さっきも言ったように役に入りきるってゆうのは、何かしらの本人がもっているものがそこにあって、それを通して発せられるものだと思っているので。

違いは持たせようと考えつつも、無理に変わることはないと考えている。芝居をする自分が、普段とまったく違うものになってしまうと、その役に入りきることができないという考えを持っている。その人自身が持っている何かが、役に大きく反映されてくる。だからこそ、普段の自分とかけ離れすぎてしまうと、入りきることが出来ないと考えられる。与えられた役によって、そのたびにどのような違いを持たせていくかは変わってくる。

(G-8) 役者として…まァ、見られる役者。ストレートに。僕は本書いたりとか、もちろん出来ないわけで、役者って本があって舞台に立てる場があって成立するものだと思うんで、個人的にもいろんな劇団さんとか有名な方とか見にいって、コバンザメのようについてって、稽古見させてくださいとか、ってゆうのは結構自分の得意な、得な性格してると思うんですよ、オープンな性格というか。だから、この世界入って、人とのつながりってゆうか、それがないとやっぱりいくらうまくても、そんなあんま関係ないかなってゆうか。人間性がどうしても、いくら舞台の上でいろんな人になりきろうと思っても、その人がもってる何かしらの、魂というか、その部分がそのキャラに出てくると思うんですよ、だからその人に頼んだり、指名されたりするわけで。だから、結局はね、気に入られる役者でいられたらな、と。

どんな役者になりたいか、という質問の答えは当たり前のように、なるほどと考えさせられるものだ。気に入られる役者、人間であることでいろんなものがついてくる。仕事も人気も、結局はどこにどのように気に入られるか次第で変わっていくのだろう。自分を得な性格だと言っているGは、他の劇団で客演として次回作に参加することが決定している。

(7) Hさん

Hは小学校教諭をしている。大学時代に劇団Tの代表を務め、現在はメンバーの就職などにより活動休止中だが、何年後かに、誰かがやりたいと言い出したら、活動が再開されるかもしれないと話している。彼女は、幼いころから自分を見てもらえるためのツールとして演技が好きだったと語る。

(H-1) 演じること自体の魅力。難しいな。普段も演じてるやんか。難しいな。教師とかやったらずっと演技してる。ずっと演技演技。怒ってる演技したり。怒ってるオーラで子どもらがしーんとなったら、よっしゃって。可愛いやつらめ、と思いながらも顔は怒って。演劇がしみついてしまってるから。魅力と言われると。生活のすべみたいになってるから。魅力と言われると難しいな。でも、舞台に立ってるときの魅力は、何人もの人になれるってことが魅力。こんなキャラクターの人を見てきたけど自分には無理やなーって、日常では無理やと思っても、役柄として与えられたらめっちゃ楽しくできる。何人もの人生を味わったみたいな気分になれるし。そこはすごく好きやった。

普段から演じてるという意識があり、仕事場では常に『教師』を演じている。演劇が「生活のすべになってる」ことから、演技することは特別なことではないように感じる。ただ、舞台に立つとなるとそれも変わり、何人もの人になってその人の人生を送れることが魅力になる。

インタビューの中で、自分は役を自分のやりやすいように消化して自分の性格に近づけてしまうとっていたH。日常では無理だと思うようなキャラクターでも、舞台であれば自分に近づけたものにして、演じることができる。そのため、役を演じていても自分が基本にあることがわかる。舞台で芝居をしているときに、素の自分を感じることはあるかという質問を試みた。

(H-2) 常にいる、感じてる。ちょっと冷静なつまこみを入れてる。今のはそのキャラにはなかったんちゃうかって。自分を見てる自分がいるから。なんか、見てるなーって。違うよーってゆうか。結局その人、自分なんやけど、その人が見てるのが基準なんかもしれん。難しいな。やっぱり下手な演技すると、見てる自分が「えっ？」ってなる。だからその自分を満足させるための演技を考えてるんかもしれん。完璧ってゆうか、すごい目で見てるってゆうのは感じるんやけど、でもその目は、お客さんと私を照らし合わせて見てる目って感じなんやんか。で、なんか冷静な部分がある。2人いる、2人いる。

舞台に立っているときには自分の意識は2つあって、片方が演技をしている自分を見ていてくれる。稽古の段階で台詞や動きはちゃんとできているから、あとは本番での観客の空気によって感情の出し方の違いやアドリブが加わっていけばいい。そのときに、もう一人の自分が、役としてある自分からかけ離れないようにストッパーとしているのだ。「自分個人の演出家」と表現していたが、まさにそのとおりで、役としての自分の視点ではわからない観客の視点から、演出をしてくれている。

(H-3) お客さんと作り上げていくもんやと思う。見てるお客さんによっては、全然芝居の内容が変わってくる。おんなじ芝居でも、なんかやってて、すごい大げさに笑う人がいっぱいいたら、ひとりでも笑う人がいたらお客さんも自然と笑えるようになってきはったら、いつもやってる芝居よりも面白いことをみんなが増やしていったり、ちょっと喜劇に近づいていったりやけど、あまり反応がない感じだったら悲劇のほうに。悲しみの演技が一番簡単やから。どうしてもそっちにいくし、仕上がりがいつも違う。

そのため、観客の反応にも敏感に反応することができる。誰かの表現の方法が少しでも変わっていけば、まわりの役者もそれを察知して芝居の表情を変えていける。劇団 T は役者だけでなく、音響や照明も、音の大きさや色の変化で芝居の方向を工夫していける劇団だと H は語っている。

(H-4) 舞台の魅力ってゆうのは、一からみんなで作っていく過程かな。みんなで、ほんまにゼロからぶあーってつくって行って、出来上がったときの達成感。終わってからのほうが好きかな。全部終わってみんなでお酒飲んでるときが一番好きやとおもう。みんなでやった一乗り切った一みたいな、達成感が好きやわ。

舞台の魅力を聞くと、みんなで作るということが挙げられた。その感情のピークは打ち上げだという。C が語っていた魅力と似ているようだったが、舞台に立っている瞬間に、みんなで作ったものを見せていることがいいということではなく、みんなで乗り切ったことに達成感を感じることができている。稽古中は団員同士で衝突を繰り返すらしく、何度も辞めると叫んでいたと語る H だが、劇団は解散ではなく休止状態だ。好きという気持ちももちろん大切だと思うが、本番までにそれだけぶつかってきた仲間とだからこそ、やっていけるという思いがある。休止中の現在でも、定期的にメンバーで飲みに行ったりしている。

(H-5) (普段演じてるときって学校、ですよ) そうやなあ。でも学校だけやないけどな。他もやっぱり、家族用とか友だち用とか彼氏さん用とか。なんか自然と。この子といるときは姉御っぽく、そっちかってゆうと頼れる人になっとかなあかな、とか。その人といるときはちょっと甘えた感じのほうが合うなとか。あんまり考えてやらへんけど、ばって引いて自分を見ると演じてるなーって。(一番素なところってどこですか。) どれも素やと思う。(演じてるって感じてるけど全部素なんですか) うん。一番やっかいなのが、彼氏さんといるときに友だちと会うとか。家にいるときに彼氏さんがくるとかが大変。そうゆうときに戸惑う。

人によって演じ分けているという H。しかし、そのどれもが素だと言う。状況の設定によって、異なる素の自分。演じることと素の自分であることは、日常において矛盾していない。しかし、日常のふとした場面でその矛盾を突きつけられることがある。

日常では教師を演じている時間がとても長い、それが当たり前になってきている。その意識は 30 人のお客さんを前にしているときと同じなのだろう。観客がいて、演技ができていることで舞台に立ちたいという欲求も解消されている。幼いころに、とにかく演技ができれば良かったと言っていたのが、今につながっている。舞台に限らず、H にとっては演技ができていることが重要なのだ。

(H-6) 教師がしんどくなって嫌になったら演劇したくなるんやろけど。今はこの職業が楽しい。ほんとにいいクラスもたせてもらって。びっくりするくらいいい子の集まりやから。この子らと離れて、辞めて、演劇ってゆうふうには切り替わってへんし。

今は教師の仕事にとっても満足していて、演劇をしたいと感じることはない。小学生のころから演じることに惹かれ続けていた H だが、仕事として演劇を求めるのでは

なく、帰る場所として演劇が存在している。演じたい欲求が満たされる演劇というものに代わるものとして、今の仕事があるのだろう。

(8) I さん

I の場合、芝居を始めることになったきっかけは、今までインタビューした人と大きく異なっている。まず I さんにとって重要だったことは父親から逃げるということだった。そのための逃げ道はなんでも良かったため、芝居に興味があったわけでもなく、学校に入ったあとは1年間遊んで過ごした。学校での実習もこなすことにはこなしていたが、芝居やる学校だしやっておこうかくらいの向きあい方だった。時代劇を終えて、今とそれまでとで変わったことは何か聞いてみた。

(I-1) 人付き合いかな。人付き合いのときに、前はその役だけのことを考えて、それ以外は別に関係ないっしょ？って沢尻エリカ的な考えだったの。初めてこないだやと向き合ったときに、おじいちゃんおばあちゃんだから、自分からこう、たとえ相手がどれだけ下手であろうと、一緒に芝居をしなくちゃいけないわけで、どうしようにも。ラブシーンとかあったの俺。どうしようにも仲良くしなきゃいけないじゃん。だから、そういう面で、芝居を始める前に、人としてなんかこう、うまく接しなきゃいけないってゆうのは、しなきゃいけないんだなってことは、今回の公演で。だから、今までの芝居の向き合い方とは全然違かったから、こないだ、俺の中では、こないだ芝居を始めたってゆう。今までののは全部、なしなし。遊んでたから。

在学中、劇団に在籍中には向き合うことがなかった芝居を、やっと始められたという I。それまでのものを全否定しているが、学校のプログラムにあった漫才実習は楽しかったと話していた。その頃は芝居か漫才かを選ぶ前に、父親の存在がまず邪魔をしていたため、楽しかったとはいえそれにはまっていけることはなかった。今では、やれることならなんでもやりたいと言っているが、今 I が一番やりたいことは作・演出で芝居をするために旗上げ公演を行なうことだ。

学校や劇団にいる間は、芝居をしなければならなかった。決められた状態では魅力を感じられなかった芝居の世界を、自分から離れてから気づいたのは、思っていたよりも芝居に執着があったということだった。フリーという立場にあることで、これから芝居をしていこうと決めたときに、職業：役者を選んだことになる。それでも I は役者は仕事とは捉えていない、遊びの延長だと言っていた。しかし、在学中に「遊んでたから」と言っていた演劇とは、違った遊びになっているのだろう。

(I-2) 自分の父親をずっと人間観察してたから、俺と父親は滅多に話さないんだけど、それでもどっかしらで強いつながりがある。そういう意味で父親を観察してて、初めて芝居で役をもらったときに、役を観察するみたいだなと思ったの、人間観察でしょ？芝居って。それを見たときに、自分の父親見ると同じだなと思って。抵抗というよりも、父親以外の人を見れるんだって。

I のインタビューを通して常に言われていたことは、父親との関係が人生の9割に影響を及ぼしているということだ。とにかく真面目な父親というイメージだが、それに反発して父親の思う真面目な人生から離れていくこと、自分のやりたいことを続けていることで、自己をアピールしているように感じる。

(I-3) 私はこうなりたいとか、絶対こうなるとか、役者だってこうゆう役者になりたいとかはまるでない。憧れてゆうよりも、俺はやりたいことやってるだけ。旗上げしたいからする。旗上げるのが夢じゃない。夢ってゆうとなんかかっこいいけど、でも、なんかかっこ悪いじゃん。語れるうちはいいけどさ、実際やらなきゃなって人は夢って語らないじゃん。はい、次って感じ。その後考えたらたぶん芝居やめるもん。俺の中で、芝居やめる瞬間は、親父が芝居観に来てくれたとき。親父はずーっと、いまだに芝居反対してるの。だから、芝居反対してくれてるおかげで続けられてるってのも、どっかしらにあんの。親父がいいよーって言ったら、俺が今までひねくれてきた意味がないから。

目の前にある今やりたいことを、すべて消化していくことが重要であり、その先に何かを求めるということはない。しかし、自分がやっていることが父親に認められることがあれば、芝居は辞めるだろうと予想している。たまたま入ったし学校で芝居を学んだために、自分を認めさせるためのツールとして芝居を捉えることになる。

続ける理由は父親に自分を認めさせるため。辞めようと思ってもそうできないのは、今まで認められるためにやり続けてきたことに意味を持たせたいから。続けなければ、と追われているように感じるが、それがIの生き方なのだ。そうあることで、自分の意味を見出している。先のことは考えないと言っているIだが、役者としてのゴールはもう決まっている。

(I-4) 毎日辞めようって思ってる。どっかで、どっかで思ってる。だって、フリーって初めてだから。こわい、辞めちゃうって思うんだけど。そしたら今までやってきたもの、意味ないでしょって。それってでも、舞台って一緒じゃん。やだなーって思っても、結局は乗り越えなきゃいけないはん。わーって。なんか、ね。凝縮した感じじゃん。人間の人生を。語るけど。凝縮した感じじゃん。稽古も含めて。顔合わせから全部含めて。(中略) 舞台の魅力。発表会も舞台も変わらないと思うの。学芸会でも。みんなで作り上げて、それをお客さんに見てもらうってゆう。だから、それまでの過程は、家族よりも一緒にいるわけじゃん。長い時間。だから、そのために家族よりも長い時間一緒にいるような職業ってないでしょ。作るのが好きってわけでもないんだけど、でも、お客さんに見せなきゃいけないって大前提があるから、作んなきゃいけないってゆう必然ができるじゃん。その中でだから、なんかに追われてないとなんにもできないの。そういう状況ができるから、そこが魅力。

何かに追われている状況、やらなければならないという状況は、今のIにとってそれは魅力として挙げられている。やらなければ、と急かされていることで自分が必要とされていると感ずることができのかもしれない。みんなで作り上げることに触れているが、最終的な着地点はそこだった。そして観客がいること、見てくれる人がいるからこそその必然性が重要になる。

(I-5) 普通の人だったら、芝居するのと普段って違うと思うんだ。俺は、一緒ってゆうのが、ほかの人と違うところなのかな、と思う。だから、緊張も楽しむし、集中するために、体の表現、ほかの人に対する普段とは違う表現だったり違う表情だったり、怒ったり笑ったり緊張ほぐすために笑ったりってのは、そりゃ普通にあると思うけど、でも、特別視する人もいるじゃん。芝居をする私、って。俺はそれはしたくない人だから。だって、芝居してんの俺じゃん。

(I-6) 自分がつくりあげることも大事だけど、でも、極論それ言っちゃうとき、ひとりで家の中でやっ
てればいいじゃん。家の中でもできるじゃん。でも人に見せるんだったらさ、評価はよかれ悪かれ、自
分じゃない人の第三の人がいるじゃん。それに対して自分がやってきたことを見せるわけじゃん。それ
でおかつお金とるわけでしょ。(作・演出をするんやんな？今、プランは？) 家族の物語になっちゃっ
てる。やっぱり。その芝居が、次の舞台って考えてないんだよ。とにかく、今まで俺が苦勞してきた部分を、
全部芝居にフィードバックして、それを見て、って。仲間もさ、なんか自己中じゃん。自分の自叙伝み
たいなのを見て見てって。でも、それができるんだったら、必死にやるね。で、たぶんそれで満足した
らすばとやめと思う。そこまではやってみないとわからない。

父親に否定されてきた分、苦勞してきた分を誰かに見てほしい、認めてほしいとい
う欲求がとても強いことがよくわかる。I は、何がどうなったら満足のいったものにな
るかは語らなかつたが、それは自分にもわからないのだろう。終わったときにしか、
その次のことはわからないのだ。

普段の自分と芝居をしている自分に差はあるかという質問をした。自分は自分であ
り、芝居をしていても自分であることには変わらない、という認識だ。普段演じてい
ると感じることはあるかと聞いてみたところ、「演じてんのが普通だしなぁ」と言っ
ている。普段から演じている自分も、舞台で芝居をしている自分も、1 人の自分とし
て考えている。

最後に演じることの魅力を聞いてみた。

(I-7) こないだまでは、なんかさざっと言ってたと思うけど。こないだ初めて時代劇でちゃんと向き合っ
てからは、正直わからなくなっちゃった。でもそれでいっかな、って。なんとなくって言葉割りと好きだっ
たりするの。なんとなくつつつといて続けてるってことは好きってことじゃん。なんとなくやってる、っ
て続くのは好きってことじゃん。

魅力と言われると浮かばないように、「なんとなく」に落ち着いた。続けているん
だから好きだということで、しっかりとした理由はない。とにかくやりたいと思うか
らやっている。それでも最初から最後まで中心にあった父親との関係が、ここでは見
えなかったことから、それよりも純粋に芝居を好きだという思いが出てきているのか
もしれない。

(9) J さん

J は現在フリーの役者をしている。最終目標は映画女優だが、舞台の仕事もしたい。
メイド喫茶でアルバイトをしている。小さい頃から人前に立てることが大好きで、ア
イドル役のようなぶりっ子ができるものが好きだった。

(J-1) : やっぱり、自分じゃない誰かの人生の、過去を想像して考えたりするって、絶対一般の人は
ないから、それはすごい役者ならではのことだし。あとなんか、日常生活のすべてが糧になる。役者は。
こうゆう、飲むしぐさだったりとかも、全部演技につながるし。ひとつひとつが気持ちとか、怒って
るときも、「あー今怒ってる。この気持ち忘れないでおう」とか。ただ怒ってるんじゃなくて、ひとつ
ひとつの行動に無駄がない、全部活かせる仕事だから。なんか人間として全うできそうって思う。

芝居に対してはとてもストイックである。普段の生活のすべてが芝居につながり、

無駄にならないことが魅力だと語る。ぶりっ子だとかきゃびきゃびした子といったようなキャラクターを好んではいるが、幅広い役をやってみたいと話している。憧れる女優は麻生久美子で、儚げな役がやりたいと何度も言っていた。

(J-2) 人前に立つのがすごい好きだから、見られてる快感みたい。あと、映像、映像は、反応が返ってこないけど、舞台では観客の反応があるのいいですね。観客の反応で、ちょっとまた自分が、稽古とは違う感情ができたとか。なんか、いつも新鮮なまま演じられるのが映像と違うかも。

また、観客がいることで感じる魅力もある。見られていることも大切だが、演じる上での感情の面に強くこだわりを持っている。普段の生活からいろんなことに気をつけているJだが、普段演じていることはあるかと質問すると、まずアルバイトのことが挙げられた。タイムカードを押した瞬間、キラキラ星のお姫様になる。普段ではできないような「永遠の17歳です」とぶりっ子をするのが楽しいと話す。

それ以外では、演じているという意識はあまりなく、いつでも明るくいるということに気を使っている。自分の中でそういった自分像を作り出しているようにも考えられるので、人によって自分を変えているという認識よりも、もっと無意識で素の自分を隠そうとしているような印象を持つ。

(J-3) それ以外、生活してる中で。でもなんだろう、いつも人前、こうやって話すときもですけど。いつも明るくいうってゆうのがあるから。なんだろう、なんだろう？ そんなつくってつもりはないですけど。家でもこんな感じだし。常に自分の中では、悩んでも絶対外には見せないようにしようとしてるし。(中略) 役に入ってるときは、なんか、やっぱり自分の感情じゃ、ない。役の感情だから、違う。なんかヤンキー役やってるときは、普段もなんかヤンキーっぽくなった。なんかタバコ吸っちゃったり。普段吸わないのにタバコ吸い始めちゃったりとか。

芝居をしているときは、その役が存在しているから、自分が出てこない。Jは役作りでその役のバックボーンを生い立ちからその後まで、ずっと想像していくため、普段の生活に影響を与えることが多いと話す。

(J-4) カオス状態？ 頭ん中が役と自分がごっちゃになって。なんか自分の性格がわからなくなる。自分の性格ってどんなだっけ、ってなる。稽古期間。自分こんな性格だっけ？ って。ヤンキーのときはなんかッスってつけて。自分こんなしゃべり方だっけ？ って。あれ、どうだっけ？ って。わかんなくなる。ちょっとしたことでキレそうになったり。ちょっとわかんなくなる。終わったら、自分みたいな。打ち上げやったら、イェーみたいな。

稽古期間中は、自分の性格まで見失う。役を演じるときに、自分の中にある感情や表情では足りないと感じると、実際にその役が体験していることをやってみないといけないと思うと言う。そのキャラクターがしてきたことを自分もやってみることで、その役になれると考えている。そのために、普段の自分の性格よりも、自分が演じるキャラクターについて想像した生い立ちが自分のもののような感覚に陥る。

(J-5) でもちゃんと観客を見れてるんで、観客の反応をちゃんと見て演技できてから、客観的な自分が絶対どっかに。でもだからといって役になりきれていないのかと言ったらまた違う。役だけどこにも自分がある、って。背後霊的にいるみたいな。

しかし本番中には、観客の反応がちゃんと見ることができる。役になりきっていないければならないという意識が大きいために、無意識に普段の自分が押し込まれているが、本番では舞台に立つことが好きな自分が顔を出し、観客の反応を見てそこにまた演出を加えていく。稽古期間中よりも本番中のほうが、自分を感じる人が多い。

(J-6) なんでこの台詞を言うんだらうって考える。この人の台詞があって、こうゆう感情になって自分がいうみたい。なんかそうゆうのが楽しい。あとは日常生活が無駄にならないのも、なんか全部活かせるのがすごい、いい。いつもストイックになれるのが、魅力なのかな

役について、表現についてとことん考え、役として相手と会話をしていくことが楽しい。芝居をすることを心から楽しんで、役者は自分にとって天職だと考えているように感じる。日常のすべてをそこに注いでいるが、それが当たり前のようになっている。何をしているときが一番楽しいかと聞くと、恋人といるときだと話してくれた。芝居にそこまで力を入れられるのも、支えてくれる人の存在があってこそなのだろう。演劇に関することで楽しいときはいつかを尋ねた。

(J-7) 本番ですね。本番で、なんか見られてて、観客の反応が返ってきてるとき。なんかその稽古で頑張ってきたものをやっと思わせるときが、なんだろう、開放されるってゆうか。すごい楽しい。映像だと、常に監督の意図で動くけど、演劇って役者あってのものだから、なんか好き勝手に結構自由にできるのが快感。開放される感じ。(中略) 今まで頑張ってきた、カオスになりながらやってきたのが、全部開放、一気にぐわって出来るから気持ちいい。

直接観客からの反応が受け取れる舞台だからこそ、見せている／見られていることが大きな意味を持つ。それまでに普段の自分を見失ったり、役に入り込みすぎるからこそ起こる修羅場などを乗り越えての本番だからこそ、舞台は縛られない空間で自由だと感じるのだろう。「開放」という言葉が使われているが、自分の中に作り上げたキャラクターを舞台で開放し、そして終演後に成仏させていくのだ。

(10) Kさん

Kは、幼いころは、目立ちたいという気持ちがありながらも、人前に立つのが恥ずかしかったと語る。そのために溜め込まれたものがあつたのでは、と自己分析している。何かをつくるのが好きだったため、子どもの頃に入っていた児童劇団を辞めてからは、舞台のような場での表現ではなく、詩を書いたり絵を描いたりすることが多かった。それでも、将来は役者になるんだらう、と漠然と考えており、高校での進路選択のときに、役者になることを決意した。Kはそれと同時に躁鬱病が治ったと話した。役者はなんでも経験すればするほど幅が広がるから、「つらいことでもなんでもこい！」という心構えになったことが良かったのかもしれないとKは語る。

目立つことができて、いろんな人の人生を体験できて、人の心を動かすことができるというのがKが感じる舞台の魅力だ。

(K-1) 演じる魅力ー？んー。なんだろう。普通の人、って言ったらあれだけど、全うな人生送ってる人たちはさ、なんかいろいろ、普通に幸せになればいいじゃん、自分が。そうだけど、役者になるのを考えたら、人間のさ、すべてをさ、やんなきゃいけないわけでしょ。そこを追求するのが、おもしろいよね。とことんなんか、深く。すごい深く掘り下げる作業ってさ、普通に生きてたらやらなくていいじゃん。それをやるべき人ってゆうのがね、いいかなと思って。演じる魅力、うーん。いろんな、その、いろいろ個性ってあるけどさ、人格とかあるけどさ。いろいろあるわけじゃん、悪いとこと、いいとこと。もう、知らない潜在的な自分とかさ。いろいろあるわけでしょ、見えない部分とか。それをさ、この役だとかを出して、とか。この役だったらこの感情を引っこ抜いてやるじゃん。それが魅力？じゃない？わかんないんだよね、なんか。(中略) 役者として、人に見てもらって、人に何を思わせるかってゆう、ことかな。人の心をすごく動かす存在であることが、すごく素敵なんじゃないかって。だから演技、まあ、好きだしやりたいからやってるんだけど、ただやりたいからやってるわけじゃない。仕事として、ってゆうか

普通の人、全うな人生を送ってる人という表現で他人を表し、役者はそれをやるべき人と表していることから、役者という職業にプライドを持っていると考える。Jと同様に、人間のすべてが芝居には必要で、それが充実を感じられると話している。

また、舞台で自分がしていることを見てもらって、そこから人の心を動かせる存在であることがKにとって一番の魅力だと考えられる。

(K-2) 常に。でも別に無理してるわけじゃなくて、人それぞれさ、これが私ですって見せるものがあるじゃん。見せてるって意識はないと思うよ。でもさ、みんなに接してる自分ってゆうのが、見せてる自分なわけじゃん。だからさ、なんかさ、悲しいことあっても笑ったりするじゃん。それこそさ、演技じゃない？みんな演技してんじゃない？そう思う。(中略) 私も、してるつもりないんだけど、よくよく考えたら、実はしてんじゃない？って考え(中略) だから、自分で自分をだましてる人もいるんじゃないか？私は頑張んなきゃいけないとか、私はまじめだからまじめで突き通さなくちゃいけないとか、こういうキャラだから、とか。素はわかんないな。素だと思ってるんだけどね。

演技しているという意識はあっても、誰でもそうだと考えている。「自分で自分をだましてる人もいるんじゃないか？私は頑張んなきゃいけないとか、私はまじめだからまじめで突き通さなくちゃいけないとか、こういうキャラだから、とか。」と言っているが、これはK自身に言っているように感じた。インタビュー中は、役者に対するこだわりが強いことが端々で感じられる。そうあるべきだと無意識に考えているように思った。

(K-3) 演じてるんだけど、自分は自分じゃん。でも自分じゃない人を演じてるじゃん。どっちもじゃないの？どっちもどっちも。だって、なんかイタコみたい人だったら、役が乗り移ってさー、たとえばさ、「はい、よーいスタート」で演じなきゃいけないとさ、「はい、カット」ってなったら、「はぁ」ってなるじゃん。イタコみたいになったらこんなのないじゃん。「はぁ」とか。だってさ、わかんなくない？カットかかるの待ってるわけじゃん。演じてるけどさ。だから、さ、自分がいるんじゃない？自分と役が、共存するってことじゃない。演じるって。だって自分の身体でやってるわけだからさ。どっちかってことないと思う。

芝居をしているときは自分と役とは共存していて、自分は自分だと認識している。ある舞台で、素でやってくれと言われたことがあると話すK。素でやれと言われても

それは演技であり、普段のままの素で舞台に立つことはできないと考えている。冷静に見ている自分と、役を演じている自分は別の存在として自分の中に収まっている。

(K-4)今はうまくなりたいからだけど、でもうまくなったらどうとかもないし。なんだろう。終わりがいいからねー。今芝居に出るのは、演技力のほしいからなんだけど、続けていきたいのは、表現し続けたいから。ってゆうだけ。(その方法が変わるかもしれないですよ。本を出してみたりとか、ありうるですよ)方向は変わらないけど、生き方が変わるかも。最終的にやりたいことのひとつが本書きたい、ってゆうだけ。なんかプロの役者になりたいってのはずっと変わらない。だからたとえばさー、ほんとに歌手になりたいんだけど役者から入って歌も歌ってますって人もいますでしょ？もし自分がそういう人だったら、そうせざるを得ないよね。歌から入って役者になりました。本書いたのが意外と売れて役者になりました、ってこと。役者はずっとやりたい。

うまくなりたいから続けているが、表現することはどこまでも終わりがいい。やりたいことはいくつもあって、本を書いてみたいとも思うが、役者はずっと続けていたいとKは言う。そのため、辞めようと思ったことはない。

(K-5)ないよ！ないよ。1回もないよ。ただ、やっぱりさ、すごいさー悩むわけじゃん。自分のなりたいものがあるさ、勉強でもなんでも悩むじゃん。もう私できなとかさ、超悩んだときに、私がもし役者になりたいなんて思わずに一生を終えられたらどんなに楽だったか！と思う。こんなに苦しい思いをしなくていいのに、みたい。でも辞めたいと思ったことは一度もない。だって無理だもん、辞めようって思うことが無理。(中略)自分がさ、どうしても無理ってことあるじゃん。理屈もなく無理ってことですか。辞めた自分が想像できないみたいなことですか。うん、もう生きていけない。死んじゃうと思う辞めたら。なんか生き方がわかんない。どうしたらいいかわかんなくなっちゃう。辞めたら、怖い。

ここでもこだわりの強さを感じる。役者をしている自分しか想像できない、生きていけないとまで言い切れるほど、役者でありたいと考えている。役者になると決めたときから辞めることを考えたことはないが、「私がもし役者になりたいなんて思わずに一生を終えられたらどんなに楽だったか！」という考えはある。生まれ変わりでもしない限り、役者ではないKには出会えないということだ。悩んで苦しいときであっても、役者を辞めるという選択肢はKの中には存在しない。それほどまでに役者として舞台に立つことに惹かれている。

(K-6)今後の目標？会いたい人に会う。憧れのひとと、私はね、なんてゆうか憧れのひとと、一緒に仕事したいって思いが強いから、憧れの人のところに行くにはどうしたらいいかって結構考える。それが例えばさ、「この人たちと共演したい！」って思ったから追っかけて行ったわけじゃん。それみたいな感じで、その人と会うにはどうしたらいいんだろうって考えたりとかするんだけど。なんか、この監督と一緒に仕事するには、って。それに近づいていくことを、こつこつやっていきたい。

公演をたまたま見たXの劇団に大きな魅力を感じたために、一緒に舞台に立ちたいと強く思ったKは、追いかけて行くことになる。そのときの話の中で、「自分の夢を1つ叶えようと思うことにしたの。自分の夢を1つ叶えていくことで、理想の自分に近づきたいから」と語っていた。目の前の目標をこつこつとこなしていくことで、自分の目指す役者像を追いかけていくのだろう。きっとそれにゴールはなく、理想の自

分はどこまでも進化していく。それでも K はずっと役者であり続けるのだと思う。

4. 舞台の力：受容、発散、浄化

以上見てきた 11 名のインタビュー内容からは以下のことが掴める。若者が舞台に引きつけられる理由には、「受容」「発散」「浄化」の 3 つがあるということである。

B は舞台上で、自分とは違う誰かになれることが魅力だと語っている。誰かになっていてもそれは自分自身であり、結局は舞台に立っているその自分をちゃんと見てほしいという思いが出てくる。演劇をしていくことで、自分の存在意義を見つけ、まわりに認められることを求めている。D は、演劇を始めた当初、とにかく目立ちたいということが一番にあった。人前に立って何かをすることで、自分をアピールしている。「人の前に敢然と立つことができるのがうれしい」と D は語った。他の 3 人も同様に、観客がいて自分を見、認めてくれる場として演劇を語っている。

次に、何かを表現することができる場というテーマが語られている。A は、自分が満足するものが表現できれば、それまでの困難やつらさはあまり気にしないと言っている。映像と違って舞台は少々大げさな表現がなされる。そこに自分としての表現がある。C は身体で表現しているという意識を大切にしており、舞台に関わる人みんなの個性や良さが引き出される空間として、演劇を捉えている。K は役者として表現し続けたいと語る。自分たちが表現するものによって、人の心に影響を与えられることが素晴らしいことだという考えは C とも共通している。

E、F、J は舞台の上では、自由でいられると感じており、役としてある自分を楽しむことができると語る。現実離れした役や自分とは異なったタイプの役を好み、舞台上では自分としてではなく、役として存在しているという意識が強い。現実では出来ないようなことでも、舞台ではなんでも出来る。その空間で自分の願望を自由に形にできることに魅力を感じている。現実世界では出すことのできない欲求を、舞台では浄化することができるかと捉えている。

ここで重要なことは、日常に埋もれていた自分が輝ける場所を持つ『受容』、自分を投げかけることによって起こる化学反応を楽しむ『発散』、普段の自分ではできない素の自分になれる『浄化』の 3 つが、別のことを語ったものではなく、同じことをそれぞれが別のものとして意味づけていることだろう。つまり 3 つの機能があるのではなく、演劇者一人一人がそこに異なる魅力を感じ取ることができる場であることが、舞台の魅力なのである。この点を C は以下のように示唆している。C は身体で表現しているという意識を大切にしており、舞台に関わる人みんなの個性や良さが引き出される空間として、演劇を捉えている。その瞬間にかかわっている人のすべてがそこに込められていること、そのときにしか出来得ないものであることが魅力だと語る。舞台に立っているときでも、自分が見られているということではなく、みんなで今表現しようとしているものの一部としてそこにいることが重要なのである。

以上は、演劇の舞台だからこそのものであるが、教室が同質の舞台の力を持つことができれば、子どもたちの主体的な参加が可能となるかもしれない。本稿では、舞台

の上で行われている〈演劇〉自体の特質に言及することはできなかったが、舞台の上で行われていることが演劇であるからこそ、関わる人みんなの個性や良さが引き出される空間が実現しているのであり、そのメカニズムを明らかにしなければならない。その作業は次の課題としたい。

参考文献

荒木寿友 (2013)『学校における対話とコミュニティの形成—コールバーグのジャスト・コミュニティ実践』三省堂

荒木紀幸 (1997)『道徳教育はこうすればおもしろい』北大路書房

コールバーグ, L., ヒギンズ, A. (1987)『道徳性の発達と道徳教育』岩佐信道 (訳) 麗澤大学出版会

佐野安仁, 吉田謙二 (1993)『コールバーグ理論の基底』世界思想社

永野重史編 (1985)『道徳性の発達と教育—コールバーグ理論の展開』新曜社

注1) サンプルの構成

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
幼少期				ごっこ遊び に夢中。				学芸会が大 好き。3歳 からスイミ ングをやら される。	10歳ほど歳 の離れた姉 が2人いる ため、父親 の期待が大 きい。	クラシック バレエを始 める(2歳)。ドラマ マや本が好 き。妄想が 好き。漠然 と役者にな ると思っ ている。お遊 戯会のアイ ドル役が好 きで、この ころからふ りふりする のが好き。	無理矢理兄 重劇団に入 れられる。 ピアノを弾 いたり踊っ たりするのが好き。
小学校		劇クラブ を創設。英 語劇をつく る。ピアノ を習い始め る。			ピアノや琴 を経験。絵 を描くのが 好きで、 将来の夢は ファッション デザイナー。 ●● 町での手作 りミュージ カルを観劇 し、演劇に はまる。小 4から●● に入る。		ピアノ、バ イオリンを 習う。	学芸会が大 好き。主役 に立候補し 続ける。親 に内緒で劇 団のオーディ ションを受 ける。学芸 会の影響で ピアノをや り始める。	サッカーを 始める。	小学5年生 のときに女 優●●を見 て、ライブ ル意識を持 つ。演劇や 音楽をする クラブに入 る。学芸会 では、高学 年になるにつ れて主役 に立候補す ようになる。	1年生のと きに劇団を 辞めるが、表 現すること への意識が 強くなり、そ ういった職 業に就くと漠 然と考えて いる。絵本 や詩を書く ようになる。
中学校	小学校・中 学校と、明 るい子ども ばちゃんか ら新喜劇に 入ればいい のに、と言 われる。	声楽、ミ ュージカル を経験。い ろんな職業 に憧れるが、 またまた 見ている子 どもで近所 のテレビ番 組でバベッ トを知り、 芸人を目指 す。NSCに入 ると決意す るが、多面 から否定さ れ、とりあ えず進学す る。		ロックバン ドを結成。 運動部しか なかったが、 文化祭では 全員が劇を させられる。	ギターに挑 戦するが続 かず。パン クファッション が好きだ ったし、い ろんなもの に興味があ ったが、陸 上部の顧問 が厳しく、抑 えつけられ る。	よさこいや ボランティア の団体で活 動する。	中学の先生 (音楽)に 憧れる。	水泳部に入 部。演劇部 も存在した が入らず。	サッカー部 で部長を務 める。成績 も優秀。	バレエを辞 める。『リ リィ・シュ シュのすべ 』を見て映 画の世界に 憧れる。●● のジュニア タレント部 に所属し、 CMソング などを歌う が受験のた めに1年で 辞める。	吹奏楽部に 入部。舞台 に立つこと に憧れる。

舞台の力

高校		殺陣に感動し、演劇部に入部。芸人を目指すのは変わらず、M-1に参加。高3で、劇団●のワークショップに参加し、芝居を続けることを決める。	ロックバンドを続けるが、演劇にいいイメージを持っていない。	高校デビュー。演技はなかったが、文化祭で劇をする。脚本も手がける。	●ーに入っていた友人にチケットをもらい初観劇。興味を持てることになる。学校は好きだが授業が嫌いで、よくサボる。		軽音部、ダンス同好会に入るが、特進クラスであるという理由で他部門と探め、すぐに辞める。声優の養成所に入り、3年間通う。	勉強をしなくなり成績も落ちる。父親がナイローゼになり、自身には自閉症の症状が見られる。ひねくれる。	ダンス部に入部。高校のパンフレットモデルに立候補するなど目立ち、好きな。3年生のときに母親の知り合いの劇団に入り、2度舞台に立つ。	運動部のマネージャーをする。合唱サークルをつくり、代表を務める。役者になると決めるときに躁鬱病が治る。
大学・専門	大学時代はバンドをする。途中、●映像スクールに入る。大学卒業後映画制作バイトをする。	●●映画学校に通う。漫才実習などを経験。学校外で映画や舞台の活動をしていたため、出席日数が足りず中退。	●●大学教育学部。演劇部に仮入部するが、ロックと融合された演劇に衝撃を受け、正式に入部。唐十郎の舞台に出会い、本格的に演劇に興味をもつ。作・演出・役者をする。卒業公演をきっかけに、劇団●●を立ち上げ。当時の劇団員は2人。		養成所に通う。音楽コースを希望するが人数が足りず演劇コースに入れられ、卒業公演で初舞台を踏み、そこで演劇にはまる。		●●の●センターで、ビジネスユニットに参加。後に同期と劇団●●を結成。	●●映画学校に通う。1年間はほとんど行かず、遊び歩くなり、2年目に入り、日記を書き始めたことがきっかけで、生き方が変わる。漫才実習でトリを飾り、●●のライブに出演。	●●円が学校に通う。1年間はスランプ続いていたが、漫才実習がきっかけで吹っ切れる。	●●映画学校に通う。脚本を書いたところ採用され、同時に役者もこなす。
その後		●●でガラス工芸の仕事をする。そこで劇団●●の座長に会い、舞台美術の話をお願い参加。舞台美術として●●町の手作りミュージカルの企画に参加。	公演することに劇団員が増える。現在20人前後。作・演出・役者を続けるが、役割を分担する。役者の比重が少なくなっていく。	就職し、仕事をしながら練習に参加する。	●●に出会い、衝撃を受けそのまま参加する。大阪公演や東京公演を経験。	劇団●●凍結。今後の活動予定は未定。	●●に所属するが2009年3月で卒業。ニート生活を送るが、外の劇団で客演などをする。12月に時代劇に出演。	事務所に入るが、フリーに転向。特定の演劇ユニットに参加し、代表に仕事をまわしてもらう。映画に出演。	一目ぼれした劇団を追って京都へ行く。	
現在	フリーの役者。映像の活動が中心でミュージックビデオなどに出演。舞台は気に入った劇団に客演参加する程度。	企画集団●●主宰。地元先輩たちの劇団で客演をしたり、浪遊の劇団で演出助手などをしている。現在、児童館でつくる映画の企画に参加し、脚本・演出などをする予定。	●●で活動する劇団●●主宰。子どもから大人まで幅広い層が集まり、ワークショップを通して脚本というスタイル。中心となるのは子どもたち。	●●の代表。作・演出を手がける。特別支援学校教諭。今は演出が楽しくないが、数年後また役者に返り咲くことを宣言。	●●の声優の専門学校に入学が決まっている。	社会人。よさこい、演劇など、なんでもできるグループをつくりたい。	●●で教師をする。演劇がやりたくなったメンバーを募集するかもしれない。	フリーの役者。3月に庶上げ公演を予定。	フリーの役者。●●のメイド喫茶でアルバイトをしている。3月に時代劇に出演予定。映画女優が目標。	フリーの役者。趣味でピアノを始めたり、ペリダーズを習ったりと芝居に活かせるものを常に追求している。

※本調査は 2009 年 10 月～12 月に実施された。

